

## 地震発生時の回想録

### 回想録の収集にあたって

国際沿岸海洋研究センター沿岸保全分野 准教授 福田秀樹

国際沿岸海洋研究センター（以下、沿岸センター）は東日本大震災という未曾有の大災害によりその施設に壊滅的な被害を受けたものの、高台への避難により幸い人的な被害を免れることが出来た。「無事に避難することができた」という結果だけに焦点を当てれば、想像を超えた大災害にあたって我々がなさねばならない最低限の目標は達成できたということができるかもしれないが、当事者として当日の行動を振り返ると、避難行動のみならず、避難訓練や機材・食料の備蓄などの事前の準備を含め、様々な点で至らなさを感じざるを得ない。しかしながら人的な被害を免れたことからくる充足感からか、当日の避難行動を体系的に検証する動きはこれまでになかった。沿岸センターの再建に向けた作業に埋没しながらも「至らなさ」を感じる身として、いずれかの機会に震災当日の行動を振り返りたいという思いを抱えていたが、今回、国際沿岸海洋研究センター研究報告の刊行を再開するにあたり、震災当日に沿岸センターの敷地内にいた学内外の方々の御協力の下、回想録を残せる機会を得た。地震後の敷地内の安否確認の手順についての明確な取り決めもなく、避難場所の周知も不十分な状況ではあったが、結果的に人的な被害を受けることなく避難を完了するに至った各人の思考と行動を追っていただくことで、今回の避難の危うさと得た教訓の背景を伝えることができれば幸いである。得られた教訓については、各人の回想を読んでいただくものとして、ここでは特に今回の回想録の中で多くの関係者が言及している自動車での避難について述べておきたい。東日本大震災後には、それまで原則禁止とされていた自動車での避難の是非が各地で議論された。これらの議論を受けて改正された「交通の方法に関する教則」が平成24年3月21日に施行され、「津波から避難するためやむを得ない場合を除き、避難のために車を使用しないこと」へと変更された。この「やむを得ない場合」という表現には柔軟な解釈ができる余地があるが、避難場所までの距離や災害時要援護者の存在といった、避難の初期段階である高台への移動を意識したものであるものと思われる。しかしながら沿岸センターは避難場所に適した高台には近接しているものの、津波の襲来により町の中心部に向かう道路が通行不能となると半島の岬側に孤立してしまう場所に立地しており、今回の避難では副次的に発生した火災により、人家のまばらな半島の岬側に更なる移動を迫られることとなった。自動車を利用することで本格的な雪が降り始める前に次の避難場所に移動することができたが、もし徒歩での移動のみであったならば、寒さにより体調を崩すものもあったかもしれない。センター周辺の地理的な特性について補足させていただくとともに、活動する地域の特性を考慮した避難計画の策定が必要となっていることを強調したい。

回想録をまとめるにあたり、掲載は氏名順とし、震災当時の所属・役職を付記した。また参考として回想録の末尾に敷地内の模式図も添付した。大槻氏、黒沢氏、平野氏の回想については福田が聞き取りした内容を文章とした。

御協力いただいた北里大学の吉永氏、岩手大学の森氏、岩手県の山根氏、本学を退職された大竹氏、黒沢氏、また本学職員の青木氏、大槻氏、川辺氏、平野氏には厚く御礼申し上げる。

## 回想

沿岸生態分野 特任研究員 青木かがり

### 地震発生時から避難場所まで

地震発生時、私は研究員室として使われていた二階のセンター主任室でパソコンに向かって作業をしていた。大きな揺れに驚き、机の下に逃げ込んだ。私が所属する佐藤研究室の他のメンバーは学会で不在だったため、研究室の備品の破損状況を確認しなければと思った。揺れが収まった後、研究機材などがある1階佐藤准教授の部屋（第1研究室）の様子を見に行ったら、ひどい揺れだったのに関わらず、物が少し散乱していただけで、機材もデータがバックアップされているハードディスクも壊れた様子はなかった。佐藤准教授の部屋を出ると、福田助教に出会い避難を促された。この時点で、私はあれほど大きな津波が来るとは全く思っていなかった。避難が長引き、外にいる間寒くて暇になるだろうから、パソコンと防寒着、身の回りの品を持って行こうと二階の自室に戻った。避難準備をしていたところ、大竹センター長に早く行きなさい！と促された。大竹センター長はまさに命の恩人である。急いで1階に降り、大学院生や職員の方と合流し、避難場所の高台に向かった。当時は、全てのデータがバックアップされていたハードドライブを持って避難しなかったことを悔やんだ。また、避難生活の間、物資の調達や移動のために自動車があると良い場面があった。自動車を所有している職員の方や学生に、車を高台を持って行こうと促さなかったことを悔やんだ。現在はすべてのデータをクラウド上や複数の場所分けて保存するようにしている。

### 避難場所にて

避難場所に来て、まさか津波が防波堤を越えるとは思っていなかった。自分と一緒に避難場所にいた周囲の人も同様な気持ちだったと思う。高台から防波堤を歩いている男性が見えたことをよく覚えている。こちらに来て！と何人かの人と声を張り上げたが、だいぶ後に亡くなったことを知った。やがて漁具や漁船が潮に乗って（引き波）、すごい勢いで流され始めた。只事ではない、とこの時点でようやく思い始めた。それから家族に避難したことを伝えるため電話したがつながらず、逃げたから大丈夫だというメールをうった。10から20分ほど経った頃だろうか（もう良く覚えていない）、防波堤の内側にどんどん水が貯まり、まるでお風呂のお湯を入れすぎた時のように、防波堤の淵から海水があふれ返り、センターや周囲の住宅を飲み込んでいった。その後も、引き波と押し波が繰り返され、どこかそれほど遠くない場所で山火事が起こった。

日没が近づき寒くなってきたため、近所の岩間みな子氏の家にみんなで避難させてもらった。しかし、山火事が迫ってきたため、三陸園へ避難することになった。岩間氏も誘ったが、山火事から家を守ると仰っていた。高い場所が安全なのだろうが、どこにいたら一番良いのか、当時の私には全く判断がつかなかった。家族に連絡をしていたものの、どこに逃げたか伝えていなかったため、後に聞いたところ、家族はもしかしたら死んだかもしれないと思ったそうだ。父はそれでも探しに行こうとしていたと聞いた。二次災害を防ぐためにも高台に避難したことを伝えるべきだったと思う。

### 三陸園

夜道を歩き、三陸園に到着した。三陸園の方々は施設に入所されている方の対応に追われていたのに関わらず迎え入れてくれた。三陸園の方が、毛布やおにぎりを分けてくれた。外は暗く寒く、迎え入れてくれたことを本当に感謝したとともに、有事の際に自分がどれだけ無力であるかを実感した。

## 回想

センター長 沿岸保全分野 教授 大竹二雄

### 地震発生から避難場所まで

岩手県立博物館学芸員・藤井千春氏（以下、本稿中に記した所属・身分はいずれも震災当時のものである）と研究実験棟1階実験水槽室で研究打ち合わせを行った後、船舶職員室前のプラットホームで技術専門職員・黒沢正隆氏と打ち合わせを行っていた時に激しい揺れに見舞われた（後日聞くとところによれば、藤井氏は自動車でセンターから出た直後に地震に遭遇し、大変苦労したものの何とか難を逃れ盛岡に帰ることができた）。最初の揺れが収まった後、研究実験棟裏の観測機器洗場に出た。その後、北里大学から共同研究の打ち合わせに来ていた吉永龍起講師とその2名の学生やセンターの学生たちが次々に建物から出てきた。舞い上がったスギ花粉で辺りが黄色く煙ったように見える中、駐車していた自動車のヘッドライトが激しい揺れの中で異様に点滅していたのが印象に残っている。敷地内の水道管が破裂して水が数メートルの高さまで吹き上がった。黒沢氏と話して避難しようということになり、研究実験棟の玄関前に回るとすでに事務室職員らが外に出ていた。その時に大津波警報が発令されたと記憶している。黒沢氏ら船舶職員は係船岸壁に通ずる水門を閉めに向かった。玄関前で皆さんに避難するように呼びかけ、事務室専門職員・川辺幸一氏に職員・学生を避難場所に誘導するように言い置いて、研究実験棟内の確認に向かった。事務室係長・大森弘光氏は共同利用で来所していた大気海洋研究所大学院生の国分優孝氏が共同利用研究員宿泊所内に残っている可能性があるということで確認のために宿泊所に向かった。研究実験棟の1階から全室のドアを順に開けて確認して回り、途中2階センター主任室にポスドク研究員・青木かがり氏がまだ残っていたので早く避難するように声をかけた。確認を終えて外に出ると大森氏が国分氏を連れて待っており、3名で連れ立って避難場所へと移動した。

今回の震災では、建物内の人員確認や避難場所への誘導など職員の役割分担が明確ではなかったことが大いに反省すべき点であった。幸い震災当日にセンターに在所した人数が共同利用研究者も含めて16名と少なかったために問題は起きなかったものの、震災時に職員が実施すべき行動内容、それに対する役割分担を明確にするとともに、避難訓練を通じて徹底していく必要があると考える。

### 避難場所にて

赤浜地区の避難場所に到着してすぐに人数を数え、全員が避難したことを確認した。激しい余震が繰り返し起こり、津波（第2波）が防潮堤を越えて避難場所の50m程手前まで迫った。電柱が倒れ、家々がバリバリと音を立てて流れていくのを周囲の人たちと共に呆然と見つめていた。川辺氏がデジタルカメラを持っているのに気づき、そのカメラを借りて津波の押し寄せる様子を撮りまくった。津波の状況を少しでも記録に残しておこうという気持からだった。センター前の海面が激しく渦巻き、研究実験棟3階窓直下まで水没するのが見えた。係船岸壁に係留されていた研究船「弥生」が横倒しになって沈んだ。夕刻になり寒さが厳しくなってきたために、取りあえず避難場所の近くにあったセンター職員の岩間みな子氏と黒沢氏の親戚の家に二手に分かれて避難させてもらうことにした。防寒着など身に付けていなかった私は岩間氏から皮製のコートをお借りして寒さをしのいだ（結局、大槌に留まった5日間はそのコートのお蔭で寒さをしのぐことができた。岩間氏のご厚意に大変感謝している）。その内に赤浜地区（2丁目）で起こった火災がひどくなり、避難場所がある赤浜3丁目にも火の粉が盛んに飛んでくるようになったため、黒沢氏と相談して山を越えた吉里吉里地区にある特別養護老人ホーム「三陸園」に移動することにした。「三陸園」まではかなりの距離があったものの、途中、鍵を付けたまま退避していた岩手造船所のトラックをお借りするとともに、たまたま通りがかった軽トラックの荷台にも乗せてもらうなどして比較的容易に全員が三陸園まで行くことができた。道路上に落石など少なくスムーズに移動できたのは幸運であった。三陸園には20時頃に到着したと記憶しているが、避難の受入れをお願いすると快く迎え入れて下さっただけでなく、毛布や温かいスープなどを支給して下さり大変有難かった。避難者は皆、園にあった1台の携帯ラジオの周囲に集まり震災情報に聞き入った。三陸園には2日間お世話になったが、その間赤浜地区から我々センターの避難者におにぎりの炊き出しが配達された（赤浜地区の自宅に残った岩間さんの配慮によるものと思う）。

トラックを使わせて下さった岩手造船所、荷台にセンターの人間を乗せて三陸園まで同行して下さった方、避難を受け入れてくれた三陸園職員、またおにぎりの炊き出しを配達して下さった赤浜地区の皆さまのご厚意に改めて心から感謝の意を表したい。

## 回想

事務補佐員 大槻真理子

### 地震発生時から避難場所まで

地震発生時には研究実験棟一階にあった事務室に川辺専門職員と共にいた。勤務時間も終了し、事務室内部のカウンターのところで、その日の学内便の発送の準備を終えたところだった。揺れ始めた際には9日の地震の余震だと思ったが、揺れが徐々に大きくなり、また電灯も消えたため、事務室の海側にあった扉から外に出た。通路を挟んで事務室の向かい側にあった上屋とよばれる飼料生物培養室の前で、川辺専門職員と共に揺れが収まるのを待った。前方には研究実験棟の玄関が見えていたが、水道管が破損したのか、玄関脇の地面から水が噴き出した。飼料生物培養室の前で様子を見ていても、建物から誰も出てこないことを不審に思ったが、観測機器洗場側から大竹センター長が近づいてきて、避難するように言われた。避難場所がこれまでセンター内の各所に表示されていた赤浜小学校ではなく、赤浜三丁目であることはこの際に知った。ロッカーにかばんやコートを取りに行ったが、その時は津波のことは思い浮かばず、勤務時間も終了していたこともあり、車で帰宅することも考えた。防災無線から何かしらの放送が流れていると思ったが内容までは聞き取れず、津波の襲来という危機感を持たなかった。赤浜三丁目の避難場所への道順はわからなかったものの、センター関係者の後について移動したので問題なく移動できた。だがその際に誰と一緒にあったか、記憶が定かではない。避難場所への移動の途中で長男よりメールが届いたため避難中である旨を返信したが、津波の襲来によりそれに対する長男からのメールには返信することは出来ず、以降、長期にわたってメールが使えなくなってしまった。

### 避難場所にて

地震による動揺が大きく、津波に対する危機感を強くもっていなかったことから、自宅や周辺で火災が発生していないかが気がかりだった。センター職員の岩間みな子氏の自宅付近より海のほうを見ている時に、センター関係者の一人に「潮が引いている」と言われたが、良くわからなかった。しかし湾内をものが流れているのが見え、その横で沖に向かって出ていく船が見えた。一度目の大津波が来た際には、避難場所の下の方にある岩間氏宅の付近にいたが、その後、より高所にある赤浜三丁目の避難場所付近に移動して様子を見た。その際は「今日は帰れない」ということが気にかかった。二回目の大津波が来た際には周囲の「上にあがれ」との声を聞き、避難場所より上の方に駆け上がった。山の上の方から携帯電話で写真を撮ろうとしたが、周囲の人々に電池を大事にした方が良いと言われ、思いとどまった。

時間がたつにつれ、寒くなったため岩間氏宅内へと避難した。そこで岩間氏よりお菓子をいただき、間もなく別の住宅に避難していたセンター関係者より赤浜の中心部で発生した火災が延焼してくる可能性があるとの知らせが入り、特養老人ホーム「三陸園」に避難することとなった。徒歩で坂道を上っている途中、再び携帯電話で撮影しようとしたが、やはり周囲にやめるよう勧められ、思いとどまった。しばらく歩いたのち、センター関係者が運転する岩手造船所のトラックに乗ることができたが、その際は助手席に座ったことを憶えている。

三陸園には避難している人があまり多くなく、スペースに余裕があったため足を伸ばして楽な姿勢をとることが出来たほか、毛布も十分にあったため暖をとることも出来た。また飴と飲料水があったのを憶えている。疲れていたのか、よく眠れたと思う。

翌朝になり、町の中心部からやってきた消防署の方より、町の被害状況を聞いた。そのあとに岩手造船所にお勤めで宮古市の津軽石方面の自宅に車で帰られるという方々があったので、大竹センター長と相談し、その方々に同行させていただくことにした。JR山田線の浪板海岸駅の付近まで車で移動したが、津波による被害で車の通行が出来なくなっていた。三陸園を去る時に大竹センター長からはくれぐれも一人で行動しないよう注意されていたが、やむを得ず彼らとは別れ、船越方面に向かって国道を一人で歩き始めた。幸い船越方面より来た車に同乗させてもらえることとなり、岩手船越駅まで車で移動することが出来た。岩手船越駅から自宅までは徒歩であったが午前10:00頃には到着することが出来た。

実際に津波を見るまで、自分の中で地震と津波を結びつかなかった。防災放送も聞いていたはずであるが内容は頭に全く入っておらず、ぼんやりとした現実感がない状態が続いていた。今にして思えば冷静ではなかったのだろうと思う。避難生活に入り、車がないことが非常に不便であった。もしまた避難する機会があれば、車の持ち出しも考えたいと思う。



## 回想

事務室係長 大森弘光

### 地震発生から避難場所まで

地震発生時は研究実験棟1階事務室で、ほのぼのと夜の送別会に思いをはせていた。

すると、これまで体験したことのない強い揺れに見舞われ、急ぎ事務室南側の外部に通じる扉から外へ出て、上屋（飼料生物培養室）入口付近に避難した。強い揺れは収まらず、研究実験棟と正面玄関増築分の接合部分はひび割れ離脱し、研究実験棟は倒壊するかと思うほど揺れ、建物の外壁や窓ガラスが落下して来るのではないかと思われた。また、地面からは水道管が破裂したのか水が噴き出してきた。揺れが収まってきた頃、観測機器洗場から正面玄関に来た大竹センター長から、船舶職員が係船岸壁に通ずる水門を閉めに向かったことを聞き、全員で避難するよう指示があった。

頭が混乱していたのだろう。町の防災無線やサイレンを聞いた記憶が全く無い。無いがこの時点で津波が来ることは予想し、去年のチリ地震津波を思い出していた。

避難する前にセンター内に残っている人がいないか、先生方と川辺氏と共に検索することとしたが、着任して後、避難訓練を行ったこともなく、教職員の役割分担や避難方法も決めていなかったため、それぞれが判断しなければならない状況は大いなる反省点だった。

共同利用で大気海洋研究所から来所していた大学院生の国分氏が、まだ研究員宿泊所に残っているかも知れないと思い確認することとした。宿泊所2階に上がり部屋をノックすると、まだ国分氏は部屋の中に残っていた。すぐに避難するようドア越しに告げて出てくるのを待っていたが、なかなか出てこなかった。その間は数分弱であっただろうが、自分にはとても長い時間待たされている気持ちだった。無限にも感じられる時間の果てに国分氏が出てきたので、一体何をしていたのかと思えば、彼は荷物をまとめ、帰り支度を整えていた。

その時は、「緊急時とはとにかく早く避難するもんだよ」と思ったが、津波後は大正解だったのだなと感心することとなった。その後大竹先生と3人で赤浜三丁目の避難所へ向かった。

### 避難場所にて

赤浜三丁目の避難場所に到着すると、センター関係者がすでに避難していた。全員避難していることが分かり安心し、近所の方々と海を眺めていた。この時点でも津波は来るだろうが防潮堤を越えるとは想像していなかったの、「2時間後にはセンターに戻るだろう。去年のチリ地震津波時と同様に、国道や低地には規制がかり通行止めとなるため帰宅は夜遅くなるだろう。」と考えていた。

最初の小さな津波だったと思う。海面が隆起し、係船岸壁に係留していた調査船「弥生」を転覆させた。この様子をセンターから避難する際に持ってきたデジカメで撮影しながら、悲しく悔しい気持ちになった。これまで船舶職員が細心の注意を払い、事故無く大事にしてきた弥生がこんなにもあっけなく沈んでいくのか、とひどく悲しかった。しかし本当の悲しみと絶望はここからだった。防潮堤の上で沖を見ていた人々が急に逃げ始め、その後大津波が防潮堤を越えて眼前を海面に変えた。避難所の下までバリバリと家々を押し流しながら迫ってくる。

研究実験棟の3階窓直下まで水没し、大型船が木の葉のように流されつつセンターの給水棟に引っかかっていた。この様子を撮影しながら繰り返して口にしていた言葉は「嘘でしょう」だけだった。それ以外の言葉は出てこなかったし呆然として何も考えられなかった。

夕刻になり寒さが厳しくなってきたために、取りあえず避難場所の近くの岩間みな子氏宅へ避難したが、赤浜地区で起こった火災がひどくなり、避難場所がある赤浜3丁目にも延焼するのではないかと不安になったため、近所の方が口にした吉里吉里地区にある特別養護老人ホーム「三陸園」に移動することにした。吉里吉里に移動するためには舗装路とは言え山を越えなければならず、徒歩では大変だと思ったが、岩手造船所のトラックをお借りして移動することが出来たのでとても助かった。

三陸園に到着後はラジオ等で状況を確認したり食事を頂戴したりしながら一夜を明かした。

翌12日、トラックに乗せてもらいながら避難道を通り、黒沢氏、平野氏と共に三人で国道45号線へ出て、大槌町内へ向けて歩き出した。途中路上で釜石市にある松村工業の伊藤氏とお会いし、釜石市からここまでの状況を教えてもらった。釜石市から来られた人がいたことで鶴住居町にある宿舎まで辿り着けると安心もした。国道45号線を歩き釜石方面へ向かったが、鶴住居町はがれきや土砂で通行出来ず、開通したばかりの三陸道を歩いた。

日向地区に着いた所で平野氏と別れ、崖を降りて宿舎へ向かった。日向地区は幸いにも津波が到達しておらず、何も変わらないかのようなだった。宿舎の建物も無事であり、その後盛岡へ戻るまでの間は、ほとんど地震被害の無かった部屋の中で過ごすこととなった。

翌13日、同じ日向宿舎の住民の方が自家用車で山道を越えて、釜石市新町の岩手県沿岸広域振興局に向かうとのことだったので、同乗させて頂いた。振興局内は自衛隊員も詰めていて騒然としていた。振興局1階県税室に緊急用の電話が設置されていたので借用することにした。携帯電話のアドレス帳を確認した訳だが、この時始めて携帯電話の電池切れと電池残量確保のために電池パックを外さないといけなかったことに気付く。電池残量が無い中で大気海洋研究所経理係と総務係の電話番号を確認し電話したのだが、日曜日のためか電話に出してくれる人は居なかった。交代でもいい、誰か一人出勤させて、いつ鳴るか分からない電話を待てなかったのか、と残念に思った。

その時の自分に対しても、携帯電話の確保やアドレスにあった道田先生の携帯電話に何故気付いて電話出来なかったか等々、いくつもの事を後悔し続け、忘れることが出来ずにいる。

## 回想

専門職員 川辺幸一

震災から一ヶ月程たった日、東大の総合防災情報研究センター（情報学環）に所属する地引特任助教から震災の経験談を記録に残したいとインタビューをうけました。

この記事はその時のインタビュー記事を元に、川辺が加除修正をした文章です。

### 1. 大槌から東京に戻るまでの時系列記録

#### 【3月11日：金曜日】

地震発生時、研究実験棟1階事務室にいた。今まで体験したことのない強い揺れを感じ、すぐに外に出た。そのうちに、他の教職員も屋外に出てきた。センター敷地内の落下物が心配であった。

今年になって新しく整備された避難路を使用し、センター裏手の高台へ避難。（3月3日に避難訓練があり、新しい避難経路の確認をしていた事が迅速な避難が出来た一因だと思う。）当日の天気は曇天。気温も低かった。

避難する前に、センター長の大竹先生、大森係長ともに3階から1階まで逃げ遅れの人がないか、念のため確認。

外が寒かったので羽織るものを持って避難（財布は所持せず）。避難所となっている高台はセンターの真裏にあり、住宅地になっている。

その高台には50~60人程度が避難していた。この高台より津波の発生を目の当たりにする。

避難した高台のすぐ下にまで津波は押し寄せた。

研究実験棟3階までの浸水を確認（後日、東大地震研究所の計測によると、12.2 mに達していたとのこと）。この時点で携帯電話は完全に不通。

大槌の地元採用の職員さんの自宅及び親類宅が避難した高台にあり、夜になってからその家にセンター関係者（16名）が別れて入れてもらった。

停電のため、蝋燭の火を明かりとした。余震があるたびに火を吹き消した。

19時頃、山火事が高台のそばまでに迫っており、身の危険を感じ、センター隣にある造船所のトラックを借り、特別養護老人ホーム（以下、老人ホーム）へ移動（※センター真裏から直線距離で約2.9 km）。

この頃より、上空からは山火事の火の粉とともに小雪が舞い始める。

到着した老人ホームには自家発電機があり明るかった。宿泊者用に水と毛布の備蓄があった。石油ストーブもあった。

老人ホームに滞在中に、どの道路が通れるかといったような情報を人づてで入手。

老人ホームにはラジオがあったため、ラジオで情報収集していた（NHK）。

ラジオから大槌近辺のローカルな情報は入手できず。

夜は老人ホーム内のロビーにて、床にダンボールを敷き、数の少ない毛布に数人で包まり就寝。（夜通し余震が続き、その都度窓を開放。避難経路の確保で一睡も出来ず。）

#### 【3月12日：土曜日】

早朝6時頃、吉里吉里の山中の道が倒壊した電信柱や木で通行不能になっており、その除去作業の手伝いに駆り出される。

そこで初めて津波被害の大きさを目の当たりにする。山の中、あるはずのない所に漁船やら網などが散乱している風景に言葉も出ず。

お昼過ぎに少量のすいとんの炊き出しあり。

研究員1名と学生2名がガソリンを調達するという町役場職員の車に同乗し、盛岡に移動（彼らは現金の持ち合わせがあり、その後、自力で東京まで戻った）。

地元採用の職員は、それぞれ自宅の様子を見に帰るなど始めた。

釜石まで行った職員もいた（後で聞いたところ、夜は鶴住居にある宿舎に宿泊したという。鶴住居には団地のような宿舎があり、全16世帯中の4世帯を東大が借りている）。

夕食は老人ホームから提供されたおにぎりと、赤浜（大槌町内の地名）の避難所から老人ホームに届けられた炊き出し。次にいつ食事が出来るか分からないので、おにぎり1個を残す。

#### 【3月13日：日曜日】

安渡（あんど）小学校が避難所になっているという情報を入手し大竹先生とともに移動するも、同小学校が一杯で入ることができず。

もう一箇所の避難所となっている大槌高校を進められる。

大槌高校への移動中に情報収集がてら町の中心部を通る。所々火災の煙が立ち込める町内は壊滅状態。

その途中で、産経新聞の記者に取材を受ける。

大槌高校に到着後、校長と面会。出前授業の受入などの関係で、校長と大竹先生とは震災前から面識があった。

すでに体育館は避難者で足の踏み場もない状態。2Fの教室に案内される。各方面から避難物資が届いており、その運搬を手伝う。

大槌高校の生徒さんたちの献身的な働きぶりが記憶に残る。

遠野市から支援物資を積載した車輜が同高校に到着。その物資の仕分けを手伝った。

大槌高校にいても連絡手段もなく情報収集にも限界があることから、大槌から遠野に戻る車輻に乗せてもらえないかを遠野市職員と交渉。

許可を得て、夕方ころに遠野市の車輻で遠野市内の避難所（松崎総合福祉センター）へ移動し、19時頃に着。遠野市内の避難所には電気もあり、携帯電話（iPhone）の電波もあり、充電もできた。遠野に着いてから家族への連絡と大学本部への連絡を行うことができた。センター関係者との連絡のため、大竹先生は引き続き大槌に残留。

### 【3月14日：月曜日】

遠野市の避難所に滞在，地元FM局の取材を受ける。

その模様はFM岩手で放送された模様。

### 【3月15日：火曜日】

大槌町の赤浜地区から避難してきていた女性と知り合い、情報交換をする。その人は盛岡に親戚がいて、自分の軽トラックで盛岡に行くという。その頃からガソリンが不足しているとの情報あり。

同行しても良いということなので、その人の親戚の家に一度立ち寄り、その後盛岡駅まで送ってもらう。

秋田に知人がいるので、秋田まで移動できないかを考えていると、盛岡駅周辺にはタクシーが客待ちをしていた。

当初、避難する時に所持金がまったくなかったが、その女性から1万円を、大竹先生からも1万円を借りて、盛岡駅にいた時点では2万円を所持していた。

タクシー運転手に、秋田までいくらかかるかを相談し、自分の状況も説明し、とにかく秋田までタクシーで移動し、その日は知人宅に宿泊。

### 【3月16日：水曜日】

秋田空港から羽田空港へ。

## 2. 避難中の通信事情について

地震直後の情報行動避難しながらも、iPhoneを利用してTwitterでつぶやいていた。

地震発生後、30分後くらいに急に圏外になってしまった。

周囲もメールなどをしていたが、同じタイミングで一斉に圏外になった。

町のスピーカーで何か言っていたが、はっきりとは聞き取れず。

普段は屋外に出れば、はっきりと聞くことができた。

津波警報や大津波警報は入手していない。避難したのは、船舶に関する教職員が多いのでこの規模の地震があれば津波がくるだろう、という話があった、という理由もある。

地震当日、夜になって停電となりテレビでの情報収集は不可能。ラジオは聴くことができた。

携帯電話のワンセグでテレビを見ていた人はいなかった（もしあれば気がついたと思う）。

遠野に移動する前（大槌周辺にいた時）は、人づてに情報を入手していた。

足（車などの移動手段）をもっていった人が、人が集まっている避難所（避難者が集まっている場所という意味での避難所）を行き来していた。

センター関係者の安否確認も、地震発生時に全員が1か所に固まっていたわけではない。「東大の人がどこそこにいた」であるとか、移動した先に職員の家族の人がいて無事を伝えるなど、人づてに情報伝達をしていた。

## 3. 3月3日の避難訓練について

昭和三陸津波（1933（昭和8）年）が被災した3月3日に例年避難訓練を行っている。

釜石市では午前6時に避難訓練開始、大槌町では午前7時に避難訓練が開始。大槌町での避難訓練に参加し、今年に新しく整備されたコンクリート製の避難路を実際に使って避難してみた。

研究センターから避難訓練への参加は初めて。

他1名（船舶職員）も参加。新しく避難路ができるまでは、赤浜小学校が避難所になっていた。

センターからは直線で500m程度。しかし、あまり高い場所にはない。

訓練参加後に、センター内に掲示されていた避難所の場所を赤浜小学校から、新しい避難路をつたって上がる高台に変更しようと言っていた。

訓練参加後に、センター内の人に新しくできた避難路のことを伝えていた（地震が起こる前に）。

## 4. センター内の被害や備蓄について

地震発生後にエレベータは停止するも、閉じ込めはなし。

本が散乱する、パソコンのモニターが倒れる（落下はせず）といった被害はあった。

防災マニュアルに該当するものはなし。ヘルメットは2,3個あったが、地震時には持ち出しなし。

船舶と交信するための無線をもっているが、普段は使用していない。

地震発生時にも無線は使用せず。水などの備蓄物資もなし。避難経路図はセンター内に掲示していた。

センターに所属する大学院生の約半分は、学会のためオーストラリアに出張中であったことは不幸中の幸いであった。

## 5. その他

3.11の2日前くらいに大きな地震があったが、その時は避難せず、屋上に上がって、津波がくるのを見た。船舶職員が防潮堤の扉を閉めていた。

一度帰京後に大槌に戻った時に（3月の最後の週）、鶴住居の宿舎に立ち寄ったところ、電気は復旧できた。室内は、食器棚から食器が落下し、本も落下していた。



## 回想

技術専門職員 黒沢正隆

### 地震発生時から避難場所まで

地震発生時には研究実験棟一階の船舶職員室で大竹センター長と打ち合わせを行っていた。揺れが収まると直ちに建物の外に出たが、敷地内の共同利用研究員宿泊所の脇の崖から大きな石が落下してくるのが見えた。その様子を見てただ事ではないと思い、同時に津波が来ることも意識した。大竹センター長とセンター所属の船舶を湾外に避難させるかについて話し合ったが、当時、センターの敷地内には共同利用で滞在中の外来研究員の方々があったことから、彼らの避難を優先させることとし、船舶の移動は行わないこととした。その時はその場にいた職員で手分けをして建物内に取り残されている者がいないかチェックすることとなったが、私自身はけい船岸壁前の防潮堤の鉄扉を閉めに行った。鉄扉は地震の揺れで歪んでおり、なかなか閉めることが出来なかったが、消防団の方が二名到着したので、その方たちと協力することでようやく閉めることが出来た。その後、赤浜の自宅へ走っていき、当時、自宅の庭で作業中だった造園業者の方々に避難するよう勧めた後、赤浜三丁目の避難場所へ避難した。この段階でも津波が防潮堤を越えてくるとは想像していなかった。今、当時を振り返ると船を避難させられなかったことが心残りである。また避難時、そしてその後の長期にわたった避難生活では自動車が必要とされたが、センターからの避難の際に車を高台に上げなかったことも悔やまれる。さらに冬は厚着して逃げるべきであることも教訓として残したい。

### 避難場所にて

赤浜三丁目の避難場所から、センター関係者や近所の方々とともに海を見ていたが、津波が防潮堤を越え始めたのを目の当たりにし、避難場所からさらに上の方に駆け上がった。この赤浜三丁目の避難場所は震災直前の3月3日に行われた地域の避難訓練に参加した際に知った。センターではそれまでに地域の避難訓練に参加したことが無かったが、着任して日が浅い川辺事務専門職員の強い要望により、黒沢・川辺の二名が初めて訓練に参加する運びとなった。センターでは長きにわたり赤浜小学校を避難場所としていたが、避難訓練に参加したことにより、センターに近く、結果的に浸水を免れた避難場所の存在を知ることができたのは幸運であった。

大津波の襲来から時がたつにつれ日も傾き、寒さがつづいたため、関係者は避難場所の近隣にあった自身の親せき宅とセンター職員の岩間氏の自宅の二手に分かれ、屋内に退避することとした。しかし赤浜地区で発生した火災がひどくなり、火の粉が赤浜三丁目まで飛んでくるようになったため、山を越えた位置にある特別養護老人ホーム「三陸園」まで移動することを決めた。赤浜三丁目から三陸園まではかなりの距離があったが、途中、岩手造船さんがカギを付けたまま高台に退避させていたトラックをお借りすることで、容易に移動することができた。三陸園までお借りしたトラックはさらに町の方が使われたことで、一時、所在不明となってしまう、岩手造船さんには多大な迷惑をおかけしてしまった。この場をお借りして感謝の意を表するとともに深くお詫びを申し上げたい。

## 回想

沿岸保全分野 助教 福田秀樹

### 地震発生時から避難場所まで

地震発生時には研究実験棟三階の共同利用研究室で共同利用者用のPCを操作していた。非常に大きな揺れに見舞われ、揺れ自体と、ポスター印刷用のプリンターや窓のブラインドが周辺のものに激しく衝突する様子に恐怖を感じた。揺れを感じた後、頭部を守るために机の下に入りかけたが、建物が倒壊するかもしれぬという恐怖から、部屋の中を窓側から部屋の入り口側に移動し、様子を窺った。

揺れが収まり、学生室となっていた隣の第5研究室の方に移動すると、大学院生の山根広大氏が部屋から出てくるところに行き当たった。彼とは津波に備えて避難する必要性について二言、三言、言葉を交わしたのちに別れ、三階海側の第4、第5実験室などに留まっているものがないか、確認に向かった。このような場合に建物内をチェックする手順について、訓練をしたこともマニュアルも無かった。最初の部屋に向かう段階で大津波警報が発令されたことを知らせる町の防災無線が聞こえてきた。ポケットに入っていた携帯電話を取り出し、平仮名で「おおつなみけいほう」とのみ、打ったメールを自宅にいたはずの妻に送信し、実験室内のチェックを開始した（このメールは後日、盛岡方面へ移動した際に送信され、当時は送信サーバーにも届いていなかった）。三階から二階へと各室をチェックしながら降りて行ったが、あれだけの揺れに見舞われたにも関わらず、各室ともドアは容易に開閉でき、床などに器具などが散乱していることもなかったことを奇異に感じたのを覚えている。二階まで降りた際に、研究員の青木かがり氏と出会い、避難を促した。その後、一階の確認を終え、宿舍との間の観測機器洗場に集合していた関係者と合流した。その場にいた大竹センター長に避難準備中の青木氏以外には研究実験棟内に残り残されているものが無い旨を報告した。今後の行動について相談した結果、赤浜三丁目の避難場所へと移動することとなった。津波が本館にまで到達することは全く想像していなかったが、2010年にチリで発生した地震に伴う津波が襲来した際に、職員が建物に残っていたことで消防関係者から注意を受けたことを思い出したため、全員で避難場所に移動するべきと発言したが、特に異論は出なかった。皆の移動開始を見届けた後、数人と連れ立って赤浜三丁目の住宅街を抜け、避難場所へと上っていった。

### 避難場所にて

避難場所に到着すると、町内の新港町に住む家族のことが心配になり、電話での連絡を試みたが、回線の混雑が原因か、繋がらなかった。一方でWebへの接続は可能であったため、津波の予想高と到着時刻などを確認した。その時の津波予想高は「3m」となっており、かつて経験したことが無い予想高を目の当たりにすることで緊張はしたものの、防潮堤の高さを越えるものではなかったため、強い危機感を抱かなかった。やがて湾内を漁具が流されていく異常な様子が見られだすと、周囲は騒然となった。やがて大津波が襲来したが、その際はその場で呆然と見入っており、さらに高所に移動することはしなかった。再び妻への連絡を試みたが、引き波と共に電柱が倒れ始めると電話はおろか、Webへの接続も全く出来なくなった。なんとか家族のいる新港町方面に出たいと思い、避難場所を取り囲む森林内へ分け入ろうとしたが、避難場所と森林を挟んだ向かい側の赤浜二丁目方面で火災が発生していたため、周囲の関係者に思い直すよう制止された。

日が傾くにつれ、寒さが増し、センター職員の岩間みな子氏の自宅の中に避難することとなったが、停電中の室内もやはり寒く、長期的な避難を想定した十分な防寒対策をしてこなかったことを悔やんだ。周囲が暗くなるにつれ、火災によって生じた火の粉が岩間氏宅周辺にも飛んでくるようになったため、山を越えた特別養護老人ホーム「三陸園」へと移動することとなった。地理に明るくなかった私は、状況が飲み込めず、不安を抱えながら夜道を皆について歩くだけであったが、途中、岩手造船所様のトラックをお借りすることで、疲労を重ねることなく、三陸園にたどり着くことができた。トラックを使わせていただいた岩手造船所様にはこの場を借りて厚く御礼申しあげたい。この夜間の移動と、この後、数日にわたった避難生活では、避難場所間の距離が長く、移動手段の確保が重要な課題となった。今後、同様な避難を迫られた場合には、周辺の道路状況などを適宜、勘案し、できるだけ車両を持出したいと考えている。

翌3月12日午前には三陸園を消防関係者が訪れ、町の中心部についての情報が初めて得られた。家族の安否が気になっていたもので、その方が社会福祉法人堤福祉会「らふたあヒルズ」に医療器具を運ばれる際に同行させていただくことにし、センター関係者とはここで別れた。地震発生時に自宅にいた妻と長女とは安渡小学校の避難所で、幼稚園の通園バスに乗車中だった長男とは大槌高校の校庭に駐車していた通園バスの中で、それぞれ再会することができた。3月9日午前の地震・津波の後に、防災関連物品を詰めたリュックの確認を行っていたことが幸いし、避難場所ではこれらが役に立った。避難場所の大槌高校の体育館では夜間の気温の低さに加え、余震のたびにドアを開放して風が吹き込んだため、寒さが厳しかったが、リュックにいられた銀色の保温シート・簡易寝袋が重宝した。このシートは折りたためば非常にコンパクトになるため、以降、通勤用のカバンには常に入れるようにしている。この大槌高校の体育館での寒さは今でも強烈な印象として残っている。寒さ対策も避難に忘れることが出来ない要素であることを記したい。

## 回想

技術職員 平野昌明

### 地震発生から避難場所まで

地震発生時は作業を終え、技術専門職員・黒沢正隆氏、技術補佐員・盛田孝一氏と共に研究実験棟1階にある船舶職員室に戻ってきたところであった。揺れを感じてすぐに屋外に退避し、観測機器洗場にて様子を見守った。その間に共同利用研究員宿泊所のわきの崖から落石があった。かつて感じたことがない強い揺れを感じ、津波は必ず来ると思った。その時は津波の規模などは考えず、危険な場所から避難しなければならないと思った。親族や友人の安否が気になり、メールを送ったが返事がなく、電話もかけたが相手が出なかったため、不安が募った。観測機器洗場にある程度人が集合し、避難場所に避難することとなったため、皆と共に赤浜三丁目に移動した。避難場所が赤浜三丁目であることは知っていた。船舶職員室を出てから避難までの間にセンターの中にもものを取りに戻ったりはしなかった。

### 避難場所にて

親族や友人と連絡を取ろうとしたが、電話つながらなく、向こうから連絡がないか携帯を気にしつつ、赤浜三丁目の人たちと話しながら海を見ていた。場所はセンター関係者の岩間氏の自宅より少し下った辺りだった。潮が引いていないにも関わらず、大津波はいきなりやって来た。大津波が押し寄せてきた後、浸水した赤浜三丁目の住宅街からずぶ濡れになった子供が走って出てきた。津波が引く際には対岸の海底が見えたのに驚いた。安全のためにより上方に移動し、二回目の大津波はそこから見ていた。

黒沢氏の親族の家のそばに移動し、そこから様子を見ていた。安渡か赤浜二丁目の辺りから流されてきたお年寄りが運ばれていった。辺りが暗くなってきて赤浜二丁目の方からプロパンガスのボンベが爆発する音が聞こえるようになり、煙と火の粉が流れてきた。特養老人ホーム・三陸園に避難することとなったが、三陸園についての知識がなく、場所もわからないまま皆ともに歩き始めた。少し歩いたのち、岩手造船所さんのトラックを借用することとなり、黒沢氏と共に三丁目方面へと引き返した。借用したトラックを運転し、三陸園へと向かうこととなったが、道路には前日までに降った雪が残っていたほか、三陸園に近づくころには新たな雪も降り始めたため、運転に集中する必要がある。

三陸園に到着すると紙コップでみそ汁とお菓子をいただいた。翌日に消防団の方に水を分けてもらうまで、避難から水分をとったのはこの時だけだった。センターを出てからの移動がひと段落すると、山道を使ってどうにか釜石市内の自宅に帰れないかとも思ったが、勝手な行動はできないと思い、朝まで様子を見ることにした。夜半になり冷え込んだが、明るくなると三陸園から船越湾の海沿いの方に様子を見に行った。湾の中にはまだ何か所下で渦が巻いている様子が見えたほか、見知った工場がなくなっていたので、津波の規模が大きかったことを改めて感じた。三陸園に戻ってから黒沢氏と共に大槻氏の知人の車を借りてセンターの様子を見に戻ることとなった。赤浜三丁目まで戻ったが、がれきのためにセンターに近づくことが出来なかった。この時の被害のありさまにショックを受け、釜石市内の自宅に戻りたいという気持ちが強くなった。

三陸園に戻ると津波により流されてきたものや倒れた木でふさがれていた避難道の開通作業を手伝った。開通作業には付近の製材所のチェーンソーやフォークリフトを使った。道路を通して吉里吉里の町の方から三陸園へ水が運ばれてきたのを見届けると、黒沢氏、大森氏と共に三名で町の方に出てみることにした。途中、三陸園の方からやってきたトラックに乗せてもらい、国道までやってくることができたが、国道に残った津波の痕跡の位置の高さに驚いた。乗せていただいた方にお礼をいい、国道を町の方に向かって歩き始めた。道路わきの電話ボックスで公衆電話を試したがやはりつながらなかった。トンネルを抜け、安渡小学校の裏あたりから町の中心部が見渡せたが、被害の大きさに家族が心配になった。安渡小学校の裏から大槌バイパスを歩いて城山トンネルまで来た時には城山は延焼中だった。城山トンネルを抜け、被害を受けたローソン前で黒沢氏とは別れたが、さらに鶴住居方面に歩き続けた。片岸まで下りてくると国道は泥に覆われていたため難儀したが、がれきは鶴住居川の対岸に当たる鶴住居町の中心側に特に集まっていたようで、あまり障害とならなかった。大浜渡橋の手前の交差点で日向にあった官舎に向かう大森氏と別れ、津波の被害がない三陸道を通って釜石市内の中心部に向かうことにした。三陸道では消防団の方から水とお菓子を分けてもらったが、前日にセンターを出た時から水を口にしていなかったのでとてもありがたかった。この段階で鶴住居町の中心部を通り抜けることを断念した大森氏と再会したが、大森氏は三陸道わきの崖から日向地区に降りて行ったため、すぐに分かれることとなった。両石地区付近を通った時は国道沿いにある電話ボックスのところはまだ津波が到達した痕跡があったため、改めて津波の規模の大きさを感じ、同地区にあった親類宅も被害にあったのではないかと心配になった。国道のトンネルを抜け、釜石市内の中心部に着くと市場の傍に打ち上げられていた貨物船のほか、被害の惨状が目に入ったことで不安が募り、そこからは小走りを実家に向かった。海沿いの低地はがれきが少なく、思いのほか簡単に通り抜けることが出来た。二階まで海水に浸かった実家にたどり着いたのは午後3時ぐらいであった。その地区の避難場所となっていた小学校までいくと、知り合いから家族の避難先を聞くことが出来たので安堵した。

赤浜のセンター周辺のように渋滞が発生しないような場所であれば、避難先が遠方でなくとも車での避難を考えるべきあったと思う。今回の地震の際は屋外での作業後の休憩中であったため、たまたま上着と防寒長靴を身に着けていたが、これらは避難生活や浸水した地域の移動では重宝した。冬季の避難の際にはこれらの着用を考えても良いかもしれない。また食料と飲料水については地域の方々のお世話になることになった。センターでも避難の際に持ち出す食料などを整備しておくべきだったと思う。



## 回想

沿岸生態分野 大学院生 山根広大

### 地震発生直前

3月11日の午前中は、野外調査のため宮古湾の海の上で作業を行っていた。午前中で調査が終わり、その日の夜は送別会であったため、めったに使わない山田線で大槌へ向かった。大槌駅には確か14時15分頃到着し、普段ならそこから45分位歩いてセンターへ向かうのだが、その日はなぜか歩く気分にならず、タクシーを拾いセンターへ向かった。14時30分頃センターに到着し、青木かがりさんと一言二言を交わし、いよいよ机で仕事にとりかかったタイミングで地震が発生した。センターにいたからこそ、皆と一緒に安全に避難できたことは本当に幸いだった。もし、電車に乗っている時や、もしタクシーを使わず1人で街中を歩いている時に発生したことを考えると、どうしていたか、どうなっていたかはわからない。ある意味、この日の最も安全な時間帯に発生したことは、不幸中の幸いだった。特に、避難が長期にわたったため、気心を知れている人と避難できたことは、精神的にもかなり助かった。また、たまたまかもしれないが、その時の気分や本能に従って行動したことが結果的に自分を助けることに繋がった。

### 地震発生時から避難場所まで

地震発生と同時に緊急地震速報が鳴り、経験したことがない、めまいがするような長く激しい揺れであった。しかし、落下物等はそれほど無く、揺れがある程度落ち着いたところで、ストーブのガスの元栓を締め、ガス漏れが心配だったので窓を開けた(その後、閉めたかどうかは記憶が無い)。廊下に出たところ福田先生と会い、避難した方がいいだろうという話をした(この2日前の地震では、先生と屋上で海を見ていた)。ちょうど博士論文を書いていたので、パソコンを持っていこうかどうか迷ったが、さすがに3階までは来ないだろうと思ったこと、また、避難の際は手に何も持たないことをどこかで教わったことを思い出し、ショルダーバックに財布と携帯だけ持ち外へ出た。(このときは、夕方にはセンターに戻るつもりだった。)結局、3階まで浸水しパソコンは水没したが、引き出しの中に残っていたUSBメモリから過去のデータは復活した。

テニスコートで、センターの皆と高台へ避難することについて話をした。その時は、事の重大さをそこまで感じていなかったように思う。あまり記憶がないが、そんなに急がず、誰かと歩きながら避難したと思う。このときに、家族や大学院生の天野さんへ避難する旨メールした記憶がある。赤浜の坂の途中で、住民の皆さんと海を眺め、次々に湾口へ向かっていく船舶を見ていたが、ある時から船が前に進まなくなった。それどころか、湾内が大きな渦となり次々に飲み込んでいく。波が堤防を越えた瞬間に、波が足元まで来て、急いで坂を駆け上がった。津波は何度も押し寄せ、大きい津波がある程度収まるまで夕方までかかった。その頃には、気温が急激に下がり、寒さで外にいられなくなった。そこからは、赤浜にあるセンター職員の岩間みな子氏の自宅の中に避難した。

### 避難場所にて

赤浜で一晩明かすことも考えたが、森林・住宅の火災が迫ってきており、空は真っ赤で火の粉が飛んでいる状況であった。周囲は暗かったが、皆と山の反対側へ避難することとなった。なんとか、三陸園さんに受け入れて貰えることとなり、寒さで凍えるなか、屋根と暖があり本当に助かった。その時の水分・食料は本当に貴重で、何も持たずに避難したことを悔やんだ。確か、初日から翌日までは、三陸園さんから頂いたお菓子で食いつないだと記憶している。夜になっても余震は落ちつかなかったが交代で横になることとした。しかし、全然寝られなかった。床にダンボールを敷いて、留学生のズンさんと一緒に一つのダンボールに入ったことを憶えている。次の日から、山を掘ってトイレを作ったり、道路を塞いでいた流木を運んだりした。

### 三陸園以降

三陸園で3日間避難した後、孤立が解消されたとの情報を受け、川井村まで車に便乗させてもらい、そこからヒッチハイクをして宮古まで、そこから自宅までは盛田さんの御自宅の車に乗せてもらい、なんとか帰ることができた。自宅では、電気・水道はストップしていたが、ガスがプロパンガスだったので、料理に、暖を取るのに、通常どおり使用できかなり助かった。常に、食料・水のストックをしておくことは勿論のこと、都市ガスの場合には、カセットコンロ・カセットガスを備蓄しておくことは非常に重要であると感じた。特に、災害のときは精神的に参ってしまいそうになるため、自分の好きなもの・美味しいものを備蓄しておくことが良いかもしれない。また、冬だったため、日陰には雪が結構積もっていた。発砲スチロールに雪を詰めて冷蔵庫代わりに使用できたのは大きかった。もし、あれが夏だったらと考えると、かなり厳しい避難生活になっていただろう。



## 回想

北里大学海洋生命科学部 吉永龍起

大竹先生および大学院生の畑さんと実施していたアユの共同研究に関する最終報告のため、2名の学部4年生(男女1名ずつ)とともにセンタを訪問していた。実験室で畑さんが翌日に計画していた河川調査についての雑談をしていた際に地震が起こった。揺れは過去に体験したことがないほどに大きく長かったが、あれほど大きな災害になるとは想像できなかった。2日前の3月9日に学部の卒業式があり、その最中にも地震が起こった。11日の地震は余震であると疑わず、(実際には規模がずっと大きかったのにも関わらず)大事には至らないだろうと決めつけていた。

大津波警報によって水門が閉じると車両を動かせなくなるため、その前に大船渡に向けて出発することを最初は考えた。結果的に、センタの皆さんと一緒に避難して無事であったが、個人の判断で行動していたら学生も巻き込んでいた可能性が高い。

津波の到来、家屋の流出、センタの浸水など、目の前で起こる光景は信じられなかった。普段は趣味でよく写真を撮影するが、この時は撮る気になれなかった。センタ敷地内に停めていた自家用車が流出して移動の手段を失った。

住宅地に火災が近づいていた時、プロパンガスのボンベが破裂する音が頻繁に聞こえていた。日が沈んで暗くなる中、先の見通しが全く立たず、ただ不安を募らせていた。土地勘もない私にはなにもできず、センタおよび近隣住民の方のお陰で無事に三陸園に避難することができた。

三陸園では、勤務先である三陸キャンパス(大船渡市三陸町)と学生の保護者に無事を伝える手段を考えていた。しかしなにもできず、上空を飛ぶ自衛隊機を眺めるだけであった。自宅(大船渡市盛町)の状況も全く分からず、不安だけが募り、夜も一睡もできないままNHKのラジオ放送を聞いていた。

コンタクトレンズを常用しているため、不意に備えてメガネを車に積んでいた。しかし車とともに失ったため難儀した。私は裸眼ではほとんど何も見えない。三陸園の職員の方に保存液を分けていただき、小皿に片目ずつ入れて目を休ませた。余震が続いていたため、急な避難に備えて両目から外すことはできなかった。頂けた保存液はごく少量であったため、ミネラルウォーターに食用塩を加えて自作したものも使用した。

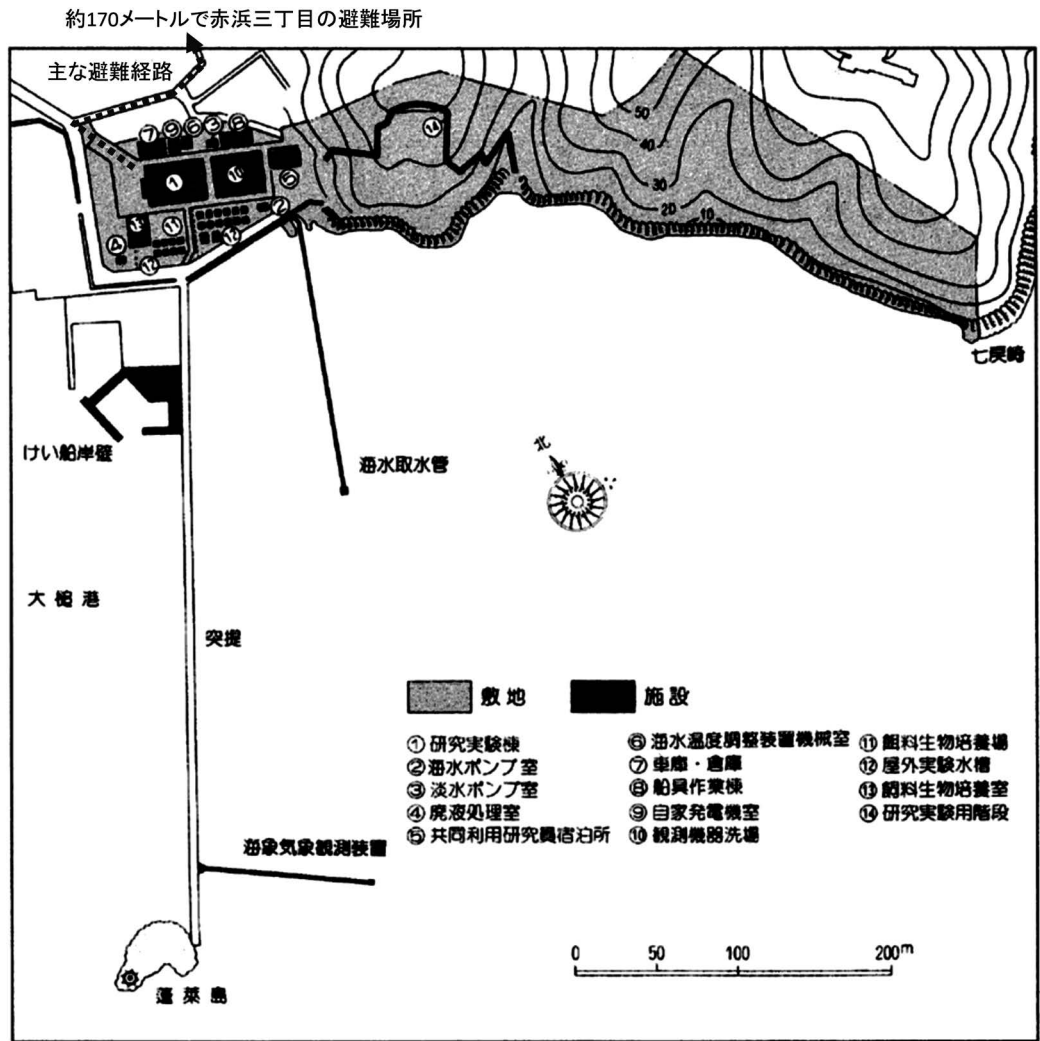
避難してから3日目に大船渡まで移動することを決定した。先に移動したセンタの学生さんに無事の連絡をしてもらっていたが、何もできない状況でとどまっている心の余裕がなかったからかもしれない。とりあえず内陸部まで移動し、そこからは大船渡まで長距離の徒歩移動も覚悟していた。三陸園の方にマスト周辺の交差点まで送っていただいた後、学生と手分けして通りかかる車両に片一端から声をかけた。どれくらい時間がかかったのか覚えていないが、断られ続けて焦っていた記憶がある。ようやく、製薬会社のミニバンで通りかかった方が遠野まで乗せてくれることになった。同乗者と荷物でほぼ満載の状態であったが、私たちのスペースを作ってもらった。お名前を記憶したつもりであったが後に思い出せず、無事の報告とお礼をする機会を失ってしまったことが大変に心苦しい。

学生の1人は軽装でサンダル履きであったため、遠野市内のドラッグストアで衣服と靴を買った。札入れは車とともに失ったが、小銭入れに2万円ほどの現金とクレジットカードがあった。あわよくばと公衆電話でレンタカー屋に連絡したところ1台だけ空きがあった。車を手に入れると気持ちが落ち着き、三陸キャンパス用の物資としてドラッグストアで菓子類や生理用品などを大量に買い込んだ。車に依存した地域では、移動手段を持つことが心の余裕にいかにも重要かと実感した。

レンタカーを入手できたことで、大船渡市まで順調に移動できた。翌朝、学生を連れて三陸キャンパスに向かった。沿岸部の道路は流出した家屋によって遮断されていたものの、裏道を通ってたどり着くことができた。無事の連絡が届くまで、私たちの安否については話題にしばらく雰囲気があったと後に聞いた。三陸キャンパスでは教職員と学生が体育館に避難し、学食の食材や研究用の冷凍サンプルを食料としていたらしい。大学本部からも物資が大量に届き、また輸送バスによって学生は関東に移動した。

学部OBの尽力によりタンクローリーでガソリンを届けていただいたため、燃料不足による苦労はほとんどなかった。市民の方々が物資不足により困窮する中、関東に本部を持つ所属組織は恵まれた状況にあり、心苦しさを感しつつ日々できることを探していた記憶がある。

仮に地震の直後に自家用車で移動していたら、自分のみならず学生も重大な事故に巻き込んでいた危険がある。同伴する学生は教員の指示にしたがって行動するため、判断の重さを肝に銘じるべきであると改めて感じた。日頃の野外調査等においても、安全確保について最大限の留意をすべきと自分を戒めたい。無事に避難し、その後に数日で大船渡に戻れたことは、ひとえに皆様のご支援を頂いたからである。ここに感謝の意を記します。



国際沿岸海洋研究センター配置図

研究実験棟 平面図

